江戸後期における農民の余暇と遊戯

鈴木 敏 夫*

(昭和46年4月17日受付)

Leisure and Play of Farmers in Edo Era

Toshio Suzuki (Muroran Junior College, Bunka Women's University)

近世における庶民の遊戯活動を当時の社会構造との対比において究明するものである。

ここでは特に幕藩制封建社会において圧倒的多数の人口を占めた農民について取り上げ、それらの活動を可能ならしめる余暇時間の実態・余暇と年中行事・余暇活動としての遊戯を中心課題として論証する。

尚、資料として当時の農民の日常活動を明細に印した加賀藩百姓、村松標左衛門の「村松家訓」をもとにした。

Physical exercises and play in Edo Era (1603~1867) were enjoyed by farmers so as to gain spiritual and physical liberation from the harsh productive activity, while Bugei (martial arts) were practiced by the Bushi class.

Farmers worked all day; therefore, there was no time for leisure or amusement for them. Physical exercises and play were often carried out by the farmers on the occasion of annual festival. But they were not played so often that they did not become common activities in Edo Era.

The main themes of this study were as follows:

- 1) Farmers, leisure hour and the concept of leisure
- 2) Leisure and the Nentyu-Gyozai (annual events)
- 3) Leisure and play in a farming village

The document on which the most of this research was based upon was the Muramatsu's Family Precepts prepared by Hyozemon Muramatsu, a farmer of Kaga Clan.

(Toshio, Suzuki: Leisure and Play of Farmers in Edo Era, *Research Journal of Physical Education*, Vol. 16, No.4, January, 1972, pp. 183~189.)

はじめに

近世における農民の身体運動・遊戯は、武士階級の所産となつた各種武芸が特権階級としての人間形成の有効な手段として、しかも厳肅さを保っていたのに比べ、むしろ苛酷な生産活動からの精神的・肉体的解放に向けられていた所にその特質がある。

一般に農民は生産生活に追われ、余暇・娯楽と

かの余地は少いとされており、また、身体運動・遊戯は祭礼などの限られた年中行事の機会に行なわれたが、運動が頻繁に持続的に日常活動となるに至らなかつたことを考慮に入れば、総じて体育活動の不振の時期であったといえる。

本研究は主として

- 1) 農民の余暇時間を問題とし、その実態を把握すること。
- 2) 農民の余暇と年中行事との関連（農民は

* 文化女子大学室蘭短期大学

余暇時間をいかに生み出したのか)

3) 余暇と農民の身体運動

について言及することにある、尚、これらの究明にあたつて基本的には農村生活(農村事情)を骨子としているので、これについては加賀藩百姓・村松標左衛門「村松家訓」¹⁾を中心に考察した。

1. 当時の農村事情

幕府および諸藩の経済的基盤は一貫して重農政策を断行したことからも明らかなように主として農村に求められていた。従つて米の出来不出来は直接「財源」にかかわる重大な問題であつた。

一方、米穀の直接生産者であつた農民に対しては身分制度上では武士に次ぐ上位階級におきながらも、町人・工人階級とは比べものにならない厳格な統制がなされた。ちなみに幕府は農民に対して「胡麻の油と百姓は絞れば絞るほどでるものなり」²⁾「百姓の難儀にならぬほどにして気まますさせぬが百姓共への慈悲なり」³⁾にも見られるように、いわば半生半殺の方針をとり、これは幕府創業以来の基本的姿勢であつた。

村松家訓は天保十二年に作られているが、この時期は近世封建社会における最も農村荒廃の激しかった時期でもある。農村内部における農民自体の階層分解はいっそう促進され、富農(豪農)・

自作農・小作農(水呑百姓)といった明瞭な格差が生じた。

例えば表1は加賀藩の能登農村における農民構成を示したものである。これによれば農民層分解は天保・弘化期までに五石以下の零細農民の増大とその没落が見られることから、北陸農村に於いては著しく進行していたと考えられる。

ここで素朴な疑問として提起されることは、ひたすら生産生活に追われ、しかも厳しい統制の中にあつた農民には労働から解放された時間はどの程度あつたのであろうか。

これを知るものとして「村松家訓」は重要な存在である。そこには当時の農家の生産活動と生活が具体的に記載され、特に年間の耕稼・年中行事・飲食例・家族教誡などが明細に印されており、近世封建社会の農村事情を知る為の貴重な手がかりとなる。⁴⁾この家訓の内容を吟味しながら農民の余暇と余暇活動としての遊戯などについて立ち入って述べることにする。

2. 余暇時間と年中行事・遊日

まず、農村における神事についてであるが、一年間にどれ程神事などの宗教行事が行なわれたのであろうか。これはおそらく各地方によつてかなりの相違が見られるであろうが、ここでは家訓か

表1 北陸能登地方の農民構成

地 域	(A) 山 上 村 8 ケ 村		(B) 下 時 国 組 3 ケ 村		(C) 木 郎 組 鶴 島 村	
石 高 合 計	3,690石3斗4升		1,011石		374石	
年 代	弘 化 3	万 延 1	天 保 12	文 久 1	天 保 12	慶 応 1
皆 切 高	0人	0人	0人	1人	0人	9
2 升 (名高)	28	36	5	1	0	6
2 升 ~ 5 石	54	84	102	111	57	61
5 ~ 15	99	99	33	43	7	2
15 ~ 50	86	90	20	16	4	10
50 ~ 100	6	5	1	0	0	0
100 ~	0	0	1	1	0	0
農 民 数	273	314	162	173	68	86
入 百 姓	(41)		(11)		(20)	

表 2

節気	月 日	耕 稼 例	年 中 行 事	節気	月 日	耕 稼 例	年 中 行 事
立春	正月朔 日	正月節	松尾大明神へ参詣 鏡餅神酒供う 大神宮御祓棚へ鏡 餅酒供う 大黒天同上 白山大権現同上 菩提寺へ年賀に参 る 床の達摩大師へ小 餅供う <u>遊 日</u>	春分	17日	麦肥・茄子を まく	同上 <u>半日遊び</u>
	2日	朝仕事男ハ縄 六十尋女ハう みそめ	<u>遊 日</u>		3月2日		宵なべなし・大神 宮御祓棚餅を供う 上巳の節句 <u>午迄遊び</u>
	3日		<u>遊 日</u>	清明	3日	3月節・稗・ 荊芥の種まき	氏神春祭・ <u>午迄遊 び</u>
	4日	女ハ紡績 男ハ山仕事	諸方へ家来を年賀 に遣す。諸方より 年賀に来る 一家の者年賀に来 る		8日		福浦宮祭・酒十二 銅を献る
	5日		一家の者年賀に来 る	土用	15日	夏大根をまく	
	7日	男ハせなこ結 い。女ハ昼ま で遊び	内仏御鏡下し	穀雨	18日	3月中	高野大師御正忌 御仏供を供う
	8日	男ハ倭編み 女ハ紡績			21日	苗代田へ施肥 大豆・ささげ 豆を蒔く	
	9日		山の神祭り、山へ 入るを禁ず 神前御鏡直し		29日		元祖の忌日
	11日	此日より山仕 事可致早朝		立夏	4月3日	4月節	
	12日	垣結い仕事は じめる			12日	田植	
	15日	此日までに田 馬の用具仕揃 える 麦の上に馬屋 肥を敷く	召抱人集る 在所 の大やけ八軒以外 の男女親子をよぶ	小満	18日	4月中	
		田の荒起し 馬屋肥を田へ まく		芒種	23日	田休	<u>半日遊び</u>
	21日			入梅	5月3日	5月節	宵なべなし 端午節句・ <u>午迄遊 び</u> 大神宮御祓棚
	2月朔 日				4日	田の草1番取 り、麦刈	
				夏至	5日		
					19日	5月中	
						田の草2番取 り・作り物の 1番培	
							<u>午迄遊び</u> 鳥のく ち米
雨水	16日			小暑	6月朔 日	6月節	
					5日	大豆・小豆に 培	福浦宮祭 <u>遊日</u> 神供、神酒を供う
					10日		<u>午迄遊び</u>
					15日	虫送り	宵なべなし
					17日	大根の種まき	
	21日		松尾寺御講 <u>午まで遊び</u> ・宵な べなし	大暑	20日		<u>遊日</u>
啓蟄	2日	二月節			7月 7日	大根・油菜ま く	七夕節句 <u>午迄遊び</u>
	初申日	田の荒起し	一ノ宮祭、 <u>遊び</u>		13日		宵なべなし
飛雁	2月12日	種池へ種籾を 入る	大神宮御祓棚へ田 苗米奉献、持仏堂		14日		<u>遊日</u> 御厨子に小 豆餅を供う

節気	月	日	耕 稼 例	年 中 行 事	節気	月	日	耕 稼 例	年 中 行 事
処暑		15日		灯明上る <u>遊日</u> 位牌に呉供 膳上る 同 上			25日	いかなる事あ るもせ5日ま でに秋庭を仕 舞うべし 米搗き、馬の 飼草の干草、 箕を切る	年より相止)
		16日							
		21日	7月中・稗刈 り。畔草刈り						
	8月	朔日		<u>午迄遊び</u>					
		3日							
白露		7日	8月節、稗刈 り		12月	12日	12月節 架積を作る 大根をさらす 餅米をさらす 凍り豆腐	歳暮の進物を贈る	
		11日		宵なべなし 氏神秋祭。酒壺対、 12銅を供う <u>遊日</u> 福浦宮、白山宮。 神棚へ御酒を供う <u>午迄遊び</u>				凍り豆腐を作る 乾杓を山より運ぶ 煤払い 宵なべなし	
		12日							
飛雁 秋分		15日					20日		
		21日					27日	12月中	
		22日	8月中 稲架を立てる 稲刈り						餅つき 宵なべなし
寒露	9月	8日	9月節	宵なべなし 重陽節句、 <u>午迄遊 び</u>			28日	門松を結ぶ(松・ 竹・ゆづり葉)	
		9日					29日	「小 年」雪隠、 小便所掃除 宵なべに箸削る 「大 年」 宵なべなし	
土用 霜降		20日					晦日	その他の行事	
		23日	9月中 稲刈仕舞	宵なべなし					
		晦日		神おくり、宵なべ なし					当才駒ちり焼祝い 安産七夜の祝い 餅つき 御上より触有たる <u>遊日</u> 節分の夜
立冬	10月	8日	大根の稼りと 言てこの頃大 根を引く	翌朝朝拝に行く 黒米4升あてとら せる					
		9日	10月節 干菜を作る						
			庭仕舞 米御蔵納 用材を山より 出す						
		晦日		神迎え、宵なべな し 一ノ宮祭、 <u>遊ばず</u> 山祭、 <u>遊ばず</u>					
	11月初	午日							
小雨		9日							
		10日	11月節 雪垣を作る 売米は当月を 吉とす						
		24日		はい送り(天保5					

ら当時の農村における神事の実態を分析して見ることにする。

図一

これによれば、十二ヶ月を通じて各月ともに宗教行事を行なっていることが判るが、神事の年間総数二十八日であり、少なくとも農民は月平均にして二回は宗教行事とかかわりを持つことになり、これは近世における農民の信仰性を物語るものである。

農民の生産活動からの解放に伴って生ずる余暇の問題は、実はこの年間二十八日の宗教行事と深い関連があるのでさらにこれについて言及する

図二

必要があろう。

小作農民に与えられた労働から解放されたいいわゆる余暇の実態についてであるが、これを家訓の生活内容から明らかにしてみると、遊日なるものは年間を通じて総計二十四日（此内半日休みをも含む）となつている。図一・二は各月毎に遊日数を示したものである。

これによれば農民の遊日は一月・六月・七月・八月に多いことが判明する。これらの月は何故遊日が多いのかが問題になるが、表一・二・図一から明らかなように宗教行事の多いこと、農閑期にあたっていることがその原因となっている。従って余暇については月毎によりかなりアンバランスがある。それ故、こうした事実は、近世における農民が生産生活に追われ、余裕のない生活を裏づけることにもなる。しかしながら家訓から算出した余暇時間・余暇の実態は農村事情の悪化という条件下での数字であって、近世を通じて多少の幅はあろう。

特に天保期は幕府をはじめ諸藩の藩政改革による経済政策是正の一環としての農村政策・農民の労働強化風俗矯正などの影響もあって、農村における古い行事の改変・廃絶が見られ、農民が季節に応じて「律義に行事を定めたりすることが出来なくなった。」⁵⁾

そして農民の遊日は年中行事と結びついているので、行事の廃絶は必然的に遊日の数を少くしたと考えられる。しかしながら、その代りに藩によつては藩当局が農民の遊日・行事の回数などを定めたところもある。

文化四年、奥州塙御料所領地内の遊日の制定⁶⁾はその典型である。

定レル遊

- 正月朔日・二日・三日・七日・三月三日・五月五日・七月七日・十五日・八月朔日・九月九日
- 氏神・祭礼日（一ヶ年ノ内二日ニ限ル）
他神事ハ一ヶ月一日（奉公人之儀者主人ノ存寄次第）

○ 婚礼・葬儀・法事・祝儀

ところで村松家訓に見られる遊びの意味についてであるが、家訓内に用いられた遊日・遊ぶ・遊ばずといった用語をどのように解釈すべきか。

「遊ぶ」という動詞は元来、日本ではかなり古くから使われており、その意味も多様である。

- 心を慰める・楽しむ・散歩する
- 神楽をする・音楽を奉ずる
- 遊学する・学問する
- 泳ぐ・遊山する

即ち、舞踊、音楽、遊戯、娯楽⁷⁾に興ずる人間の動き、活動のさまを「遊ぶ」と表現する反面、身体をいやす（慰安）の意味にも使われる。家訓に見られる遊びの意味は種々の身体活動をするというより慰安・休息を基底としている。しかも単純に公式的に考えられがちな遊び＝遊戯ではない。つまり、公認された自由時間であり、その時間は各人が思うことを好きなように使い、休息よし、遊戯よし趣味とする事を心おきなく行なう事が可能となるのである。

農村において農民が生産労働から解放されるのはほとんど慣例化された年中行事の時であつて、

それには農村の構成員の参加が前提とされる。

それ故、農民は行事遂行のたてまえとして労働から解放された。従つて農民の余暇は封建的生産関係の中では容易に産出出来ない。生産力の増大にともなう物質的富の蓄積はかかる状況下では望むすべもなかつたし、ましてや精神的豊かさを得るだけの余裕もなかつた。しかし農民が貴重な農耕に費す時間を砕いてまで神事・仏事といった行事に参加した背景には信仰というものが彼等の生活と切り離し得ないものであつたし、事実、農民の余暇について言及する上に重要な意味を持つものであった。

3. 余暇活動と遊戯

すでに明らかにしたように近世封建社会における農民の余暇時間は極少であり、しかも全生活において余暇の占める率はわずか4%たらずであつた。

こうした事実から今日、余暇が生産力の急速な発展の中で作業行程の能率化・合理化・労働時間の短縮等と随伴してとらえられるのに比し、過重労働時間からの精神的肉体的解放として、しかも年中行事などの宗教的權威を借りて農民が余暇時間を創り出したと見てさしつかえないだろう。そして遊日の制定はまさに余暇時間の獲得に他ならなかつた。

農民の身体運動・遊戯をする機会はほとんど年中行事と密接に結びついてしたが、そうした機会を与えた意味で農民自身で作った遊日の制定(近世後期には上から強要されるが)を積極的に評価しなければならない。遊日の制定は村落において農民の生活からして、決して偶発的なものではなかつた。そして「祭りの為に休業したのが変じて休んで遊樂するようになると休むことの意味が転化する。聖なる休日は俗なる休日になつた。こうなると年中同じ業態に勤労する者などは休息が必要となり、彼等の間には月ごとに朔月と十五日とを休む慣例が出来た。」⁸⁾

かくてわずかの自由な時間に農民の体育活動がなされた。彼等の運動・遊戯の代表的なものは風上げ・コマ回し・追羽根・芋虫・かくれんぼ・手まり・石打ち・首引き・腕押し・ひざはさみ・綱引き・すもう・力石・登山・遍歴・舞踊などであ

るが、これらはすべて彼等を取りまく自然的、社会的環境の中から創り出されたものばかりである。

農民の行なつた身体運動・遊戯は直接には1)生産労働に因を發し、反映された(腕押し・首引き・力石・相撲など)2)年の吉凶を占う、いわば信仰を基盤とした(舞踊・綱引き・遍歴・登山など)に分類される。

しかし既に述べたように農民の自由な時間は極めて少なかつたし、あつたとしてもそれは主として慰安・休息にあてられたので、これらは年中行事の一環としての単なる行事として行なわれたに過ぎなかつた。

ところで年中行事そのものが時代と共にすたれたり変って行くにつれて、そうした行事に付随する農民の間で行なわれた各種遊戯も新たに創り出されたり、廃絶された。

「五月五日、勝負せふと称して駄坂の子供は峠に屯し、当村の子供は酉のいなばのいただきに屯して互に石を打、或は塔婆を以てたたきなどして終日戦ふこと、昔よりの風俗なりしが、寛政の頃其事止ぬ。」⁹⁾

これは印地打合戦のことを表現したものであるが、少なくとも古くから行なわれた遊戯などにすたれたり、変って行く傾向があつたと推察される。

注及び参考文献

- 1) 「村松家訓」加賀藩村松標左衛門、天保12年著。これには農家の一年十二月にわたる行事が詳しく記されている。長岡藩百姓大平与兵衛「農家年中行事記」もこれと同類である。
- 2) 本多利明「西域物語」これについては高橋梵仙「日本人口史の研究」250頁参照
- 3) 「史料による日本の歩み」(吉川弘文館)Ⅳ, 88頁
- 4) ここでは曾根論文「日本歴史」256号をもとにした。
- 5) 「図説日本庶民生活史」130頁参照
- 6) 「百姓共神事ト唱月之内ニ休日致、農業不精相成候間、正月之内七日程、七月之内盆中五節句一日其外鎮守祭礼日等定レル遊日之外、休日一ヶ月一日ニ限可申事」(文化八年、寺西重次郎)
- 7) この分類については角川古語辞典(武田・久松編)による。
- 8) 「図説日本庶民生活史」130頁引用
- 9) 同上 134頁引用。